

特集

加茂谷に元気な声がこだまする

～ 武蔵野大学農業体験ボランティア レポート ～

加茂谷地域では東京の武蔵野大学の農業体験ボランティアを受け入れる取組を行っている。

この農業体験ボランティアは、武蔵野大学がキャリアデザイン教育（人生を主体的に設計していくための理論と実践）の一環として5年前から実施している。長野県などでも行われている。普段、何げなく口にしてる食品のほとんどとなっている農産物の生産現場を知り、都市生活を支える第一次産業の存在を学ぶもので、阿南市とは、東京事務所活動のつながりで、「加茂谷元気なまちづくり会」が受け入れ母体となり昨年初めて計画された。

準備が整い、あとは受け入れを待つばかりとなっていた8月10日、午前4時15分頃、加茂谷に避難を呼びかけるけたたましいサイレンの音が鳴り響いた。台風11号による猛烈な雨で、加茂谷地域の無堤地区などで河川が氾濫し、加茂谷の町は一面、泥の海と化した。住宅が浸水したほか、農業用施設や水田も多大な被害を受けた。

惨状を目の当たりにして農家の人々は打ちのめされ、心は沈み込んだ。ボ

ランティアの学生を受け入れるどころではなく、事業の中止を含めて検討していた。ところが惨状を知った大学側から「受け入れていただけなら災害復旧のお手伝いでも何でもします」という温かい申し出があったことから内容を見直し、災害復旧ボランティアとしての受け入れを決意した。

学生は、東京から夜行バスに揺られて駆けつけ、倒壊した農業用ハウスの片付けなどの災害復旧作業を行った。彼ら彼女らの一生懸命な姿や若さ、笑顔、元気が、被害で沈み込んでいた農家の人々に勇気と希望を与え、災害復興の気力を奮い立たせた。



このように困難な状況で始まった武蔵野大学農業体験ボランティアだったが、それも加茂谷と大学との縁を問う試金石だったのかもしれない。

そして現在、若者の定住や中山間地域の活性化を探る試みとして市内外から注目されている。



いつか一段とたくましくなって帰ってきてほしい。
そして、また元気な声を聞かせてほしい。

1 よっしゃ、農業やるぞー。2 加茂谷井、こりゃいける。おかわり！3 手作りの輪投げ。う～ん、難しい。4 心のコもった贈り物。ありがとう。5 お疲れ様でした。農作業の後のジュースはうまいね。6 あななんもかけつけた。

最終日、参加した学生が描いた看板が楠根町と大井町の「すきとく市出荷場」に掲げられた。学生からは「この経験を東京に持ち帰って、どう自分や社会に反映させていくのが恩返しにつながると思う」と話した。加茂谷の住民や自然にいだかれて、これから生きて行く上で、大切なことを学んだようだ。いつか一段とたくましくなって帰ってきてほしい。そして、また元気な声を聞かせてほしい。

また、学生の滞在中は、地元の方が思い出作りにとさまざまな催しを企画した。受け入れ農家との懇親会では、お菓子を食べながら話が咲いた。ほかに地元体協が開いたカローリング大会や児童クラブなどと世代を超えた交流を楽しんだ。特に水井町・大井町の住民でつくる「西部ふれあい塾」との交流会では、地元でとれたシイタケやサンチュを使った創作料理「加茂谷井」がふるまわれ、学生はご当地井に舌鼓を打った。また、一緒にゲームをしたり花火をしたりと心温まるひと時を過ごした。そんなようすを優しいまなざしで見守っていた大学引率者の湯川浩二さんは、「見知らぬ者同士がコミュニケーションを取ってすぐに打ち解けられる経験は東京ではなかなか味わえないことです。加茂谷の皆さんの懐の深さを感じました」と感激していた。

農業体験ボランティア受け入れ2年目となった今年。8月27日から9月16日の21日間にかけて、総勢79人が参加した。学生は、5班に分かれて順次加茂谷に入り、4泊5日の日程でボランティア活動を行った。また、今年から新たな試みとして農家民泊を実施し、受け入れ農家は30軒にものぼった。

8月27日に行われた開村式では、「加茂谷元気なまちづくり会」の会長 山下和久さんが、「加茂谷で学ぶことを、何か一つでも心に残してほしい」とあいさつ。翌日から始まった農業体験ボランティアでは、学生は農家の方から作業の手ほどきを受けながら、いちご苗やすだちの手入れ、サンチュの収穫などに精を出した。看護学部1年生の小川 舞さんは、「何気なく食べているものでも、たくさん手がかかっていることがわかりました。いただいたみかんは甘酸っぱくておいしかった」と笑顔を見せていた。